5．海潟温泉

海潟地区では江戸時代の終わりころに垂水島津氏が、また明治の初めには公費を使って温泉掘削を試みましたが、いずれも失敗に終わったと伝えられています。しかし、飛岡の海岸に一か所、自然に温泉が湧き出していました。

昭和初期までこの温泉井戸から温泉水をくみ上げて、沸かして利用していましたが、内田鹿太郎は昭和２年（１９２７）５月に温泉のボーリングに成功しました。これが海潟温泉郷の始まりでした。

続く昭和４年（１９２９）には上之原熊太郎が、昭和５年（１９３０）に井之上助右衛門、昭和７年（１９３２）に野嶋長四郎と川畑銀蔵が温泉掘削に成功してから、海潟は一躍、温泉郷として鹿児島市を始め、近郷近在からの温泉客でにぎわうようになりました。通りには旅館、飲食店などが軒を並べ、鹿児島市と海潟を直接結ぶ垂水丸の航路もあったことを思うと当時の繁栄ぶりがうかがえます。

絵ハガキ ≪海潟温泉　江洋館≫

短期間に海潟温泉が発展を遂げた理由は、川畑銀蔵をはじめ中央地区本町の人々による積極的な新聞報道や観光案内の発行など、一大キャンペーンが大きく功を奏したからに外なりません。

海潟地区は大隅半島唯一の温泉郷であると同時に、眼前に江之島や桜島を望む風光明媚な土地柄から、昭和２０年頃の１９４０年代に入ると海水浴場、キャンプ村としても大きく発展しました。

昭和３９年（１９６４）この地にあった協和小学校、同中学校が移転したあとに宿泊施設の「なぎさ荘」が建設され、しばらくはこの地を訪れる人々も多くありましたが、長引く桜島降灰の影響や環境変化などによって、海水浴場やキャンプ場は閉鎖されて現在に至っています。

また海潟温泉も昔のにぎわいを失っていますが、風光明媚な自然を生かして、海潟地区の再生に向けて立ち上がった若者グループ「海潟温泉再生会」の今後の活躍が注目されます。